

想うらみがままに

こんなことを許しているのか
—公安警察と精神病院の共謀

本誌編集委員 小寺山康雄

本号をもって第三次『現代の理論』は終刊する。活字文化の衰退もさることながら、極論すれば左翼運動の回復不能に近い衰弱を、あらためて思い知らされた。それに抗すべくわたしは微力を尽くしてきたし、『現代の理論』の復刊も、そのひとつであった。しかし、結果は周知のとおりである。発行基金を寄せていただき、定期購読していただいた千数百人の皆さま、ときに批判しながらも暖かく見守っていただいた方々に深く感謝するとともに、心からお詫び申し上げる。

元赤軍派幹部からの手紙

二〇〇〇年代の初めごろ、元赤軍派幹部の川島宏祥から長文の手紙が届いた。手紙は二〇〇七年の拙宅の火事で焼失してしまったが、高校時代から赤軍派に至る活動歴、東大都市工学科出身で、現在は都市プランナーの仕事をしていることなどを自己紹介しながら、わたしの論文「六八―一九年の反乱と新左翼」(渡辺一衛・塩川喜信・大藪龍介編著『新左翼運動四〇年の光と影』一九九九年、新泉社所収)に共感

するという内容のものであった。東大都市工といえ、青医連とともに東大共闘の中心をにない、全国共闘運動の思想的リーダーシップを發揮した学部である。

わたしは返事を書くとともに、関西で酒を飲み語らう機会を数回持った。川島は、大阪の釜が崎で日雇い労働者の支援活動をしている元赤軍派の仲間を訪ねて、しばしば大阪に来ていたのである。これから述べる事件が起きるまでは、元赤軍派と構革派の、普通では出会わないであろう珍奇な交流であった。

事件の概要を述べる前に、川島の活動歴をざつと紹介しておこう。

川島は東大入学と同時に、六〇年安保闘争後四分五裂していたブント(共産主義者同盟)の再建に奔走し、大管法闘争など「輝く六〇年代学生運動」をになつてきた。そして都市工大学院に進級してからは、当時東大教授をしていた丹下健三など著名な専門家がこぞつて認めるほど才能豊かな研究者として、アカデミズムの道歩んでいた。

ところが一九七〇年「よど号ハイジャック」事件が起こり、赤軍派政治局員だった川島は共同共謀正犯として逮捕され、七〇年七月から七四年十二月まで未決拘留される。さらに判決確定によつて七九年七月から八〇年十月まで懲役刑に処せられるのである。同時に、七〇年に、東大共闘議長だった山本義隆とともに、大学を除籍(強制退学)される。

しかし、川島の受難は決して孤独な闘いだつたのではない。川島の叛骨精

神と研究者としての才能を高く評価してきた前述の丹下健三など心ある東大の教師らは、判決に抗議し、早期保釈の嘆願書を提出するなど、さまざまな支援を惜しまなかった。

川島もそれに応えて、八〇年十月の保釈後、都市プランナーとしての仕事を開始する。八一年二月には閣議決定が必要な「つくば国際技術博覧会(八五年開催)」のワーキンググループのキャップに推されるほど、短期間でめざましい業績を上げた。

しかし、ワーキンググループの仕事は、先輩であるグループの一員が、川島の政治的経歴を暴露し中傷したため辞めざるをえなかった。以降、今日まで個人事務所を立ち上げ、独力で仕事をしてきた。

都市プランナーとしての仕事の一方、彼は自分たちの政治活動を総括する作業を続けてきた。「連合赤軍の全体像を残す会」で、六〇年代後半から七〇年代にかけての赤軍派の活動の全

体的総括を試みている。

総括は運動、とりわけ左翼運動にとつて不可欠・不可避の作業であるが、私の知るかぎりでは、ともにそれをやっていく党派は新旧を問わず、ほとんどいない。日本の左翼の低迷の大きな要因に、総括の不在があるのに、である。

公安の違法ガサ入れ

二〇〇七年六月、警視庁の公安刑事を名乗る二人が川島宅を訪れ、あれこれ探ろうとしたが、川島は適当にあしらつて追いつ返した。ところが同年十一月三日の夜半、帰宅を待ち伏せていたくだんの公安二人が突如あらわれ、背後から川島を押し倒し、ポケットの鍵を奪い、川島を引きずつて家に押し入つたのである。

公安刑事たちは徹底的にガサ入れし、後でわかつたことだが、実印、クレジットカード、書類、手紙などを奪い、パソコン、時計など貴重品を粉々

に壊して帰った。もちろん令状なしの違法行為である。川島は明け方まで水一滴飲まして貰えず、意識不明状態になった。

ついでに言うと、クレジットカードはその後何回催促しても再発行されないそうだ。公安が再発行を妨害しているのだ。

翌日の日曜日、公安が連絡したのだろう。市役所の守衛と民生委員が川島宅を訪問し、川島の状態を見て一一九番通報し、救急車で昭島市の徳州会西東京病院に緊急入院した。そして、十一月十三日に体調が回復し退院することになった。

晩秋という寒い季節に脱水症状で十日近くも入院するとは、よほどのことである。公安刑事によって何かされたのかもしれないが、意識を失った川島には記憶にない。

精神病院に強制入院

公安による違法、人権蹂躪の本番は

懲役から死刑にかさあげされたのである。七〇年代、権力がことあるごとに広言してきた「過激派に人権なし」は今日でもまかり通っているのだ。

刑務所と精神病院の違いはあるが、川島が丸岡修の二の舞を免れられたのは「よど号事件」で北朝鮮にいる赤軍派の小西隆裕のお母さんのお蔭である。お母さんが「この二カ月川島さんとまったく連絡が取れない」と、花岡紀男ら元赤軍派の仲間たちに声をかけ、彼らが四方八方手を尽くし、十二月二七日に陽和病院を探りだし川島を救出したのである。

公安と陽和病院を弾劾せよ

わたしが事件を知ったのは一年前である。こんなことが許されてはならない、公安と陽和病院を弾劾しよう。弁護士を含む幅広い戦いを開始しようではないか、と川島に言ったが、彼はそれを婉曲に断った。おそらくわたしに迷惑をかけてはならないと遠慮したのだろう。

これからである。

十三日退院することになった川島に、看護師が「お車が参りました。」と告げた。病院は自宅からかなり遠いところにあつて、体力もなくなっていた川島は、これ幸いとその車に乗り込んだ。車の運転席には日頃世話になり、信用していた年配の知人が座っていたので、川島はすっかり安心してしまった。ところが車は、川島のアパートとは逆方向にひた走り、着いた先は「陽和病院」とコンクリートの壁に大きく書かれた精神病院だった。公安から通報を受けていたのであろう、院長以下の医師団と看護師大勢が待ち構えていた中に放り出された。

すぐに「診察」が始まり、直ちに「あなたは病気で。しばらく入院しなればなりません」と、「診察」もろくにせず、問答無用に告げられ、抵抗する川島をよつてたかつて部屋に監禁したのである。

監禁されたのは閉鎖病棟の「保護

しかし、ことは赤軍派や過激派にとどまらない。維新の会代表の大阪市長橋下徹が「政治は独裁である」と広言し、労働組合を敵視し、公務員の思想調査をし、思想・信条の自由、政治活動の自由、労働組合活動を公然と否定している時代である。格差が拡大し、貧困化が絶対的に進行している今日、同じ階級・階層に属しているながら、多恵まれた状況にある者をねたみ敵視する風潮が広がっている。くわえて自民、民主の政治的無能による政治への不信感の蔓延。ハシズム(橋下イズム)は時と所を得ているのだ。一九二〇―三〇年代のムツソリーニ、ヒットラーのように。

ここでファシズム論を展開する余裕はないが、ムツソリーニもヒットラーも軍事クーデターのように、上から暴力的に権力を握ったのではない。当時のイタリア、ドイツの政治的、経済的窮状の中で、鬱積する大衆の不満をデマをまじえて巧妙に組織し、既成政党

「室」で。「保護室」といえば聞こえはやさしいが、刑務所で言えば懲罰房である。

川島によれば、刑務所でも一回も工場に出してもらえず、独房で悶々としていたが、「保護室」はそれ以上に苛酷で、外部との連絡は一切取れず、身動きするスペースもない部屋だったという。その後遺症だろう、わたしより三才年下の六〇代なのに、数十年前の年老いた農民の多数がそうであつたように背中が大きく曲がり、足を引きずつて歩く。そのまま放り込まれたままだったら、同じ赤軍派の丸岡修のように人知れず死んでいたかもしれない。

丸岡修は八七年に逮捕され無期懲役を課せられたが、九三年に肺炎にかかり、二〇〇四年にそれが原因で拡張型心筋症を患った。弁護士が刑の執行停止と治療を何度も申請したが受け入れられず、そのまま放置され二〇一一年五月二十九日に死去した。

いわば権力によって、意図的に無期

に対する不信を煽り、いわば下からの大衆動員によって権力を握つたのである。橋下徹がやっていることは、まだ大衆動員こそやっていないが、まさにファシズム的手法である。ヒトラーは映画とラジオを駆使したが、橋下のパフォーマンスを連日無批判に報道する関西の新聞とテレビは、ハシズムの御用メディアと化し、下僕に成り下がっている。しかも、そのことに彼らは無自覚なのである。

くわえて前述してきたように、権力のはばかりることない暴力と陰謀がのさばっている。わたしたちの知らないところで、第二、第三の川島宏祥、丸岡修が呻吟しているかもしれない。わたしは川島を説得して、この事件を彼の周囲にとどまらせず、より広く世に訴えることを納得してもらつてこれを書いている。

嗚呼、それにしてもこうした時期に『現代の理論』を失うことはまことに辛く切ないのである。